

嫉妬

神永学

1

彼は、天井を見上げてため息を吐いた――。

椅子の背もたれに身体を預け、目頭を揉みながら小さく呻く。

「大丈夫ですか？」

私が声をかけると、彼は「何でもない。大丈夫だ」と笑顔を浮かべてみせた。

だが、それが無理に作った偽りの笑みであることは明らかだ。

彼の身体を抱き締め、「あなたは何も苦しむ必要はない」と囁きたいところだが、私にはそれができない。

私は彼の友人でも、恋人でもない。秘書に過ぎない。ビジネスパートナーであって、私生活に口を挟む立場にない。

私が、彼の秘書として働き始めたのは二年前のことだ。

会社のCEOとして経営を担っているだけでなく、エンジニアと

してシステムの開発も行っている。

彼は、その両方において、並外れたパフォーマンスを発揮していた。従業員は五十人ほどいるが、彼一人で成立していると言っても過言ではない。

そんな彼のスケジュールを管理するのが、私のメインの仕事だった。

彼の仕事に優先順位を付け、それに合わせてスケジュールを割り振ってあげたい。私の能力があれば、どうということはない。そう思っていたのだが、それが大きな過ちだった。

私は、パズルのように空いている時間にスケジュールを当て嵌めるだけで、満足してしまっていた。

隙間なく詰めたスケジュールのせいで、彼はろくに食事も睡眠も取ることができず、過労で倒れることになってしまった。

叱責を受けることを覚悟していたのだが、彼は「最初は、誰でもミスをする。むしろ、君が人間らしいミスをしてくれたのが嬉しい」と笑ってくれた。

彼にとって、何気ない言葉だったのかもしれないが、私はそれによって救われた気がした。

それ以降、優先事項の第一位を業務から、彼の安定した生活に切り替えた。

頭脳であり、心臓である彼を失えば、会社はたちどころに崩壊してしまふ。多少、プロジェクトが先延ばしになつたとしても、彼が健康で安定的な生活を送ることができる方が、会社のためになると判断した。

そのためには、彼以外の人間にも、効率的に働いてもらう必要があつた。

そこで、彼に頼んで、他の従業員のスケジュール管理も、私が一手に引き受けることにした。

私が管理し、効率を上げることで、彼が休息する時間を、少しでも作ろうとしたのだ。

それから、彼の些細な言動にも耳目を傾けるようにした。

体調の変化によつては、当日のスケジュールを組み替えたりして、よりパフォーマンスを発揮できるように工夫した。

そうした提案をする度に、彼は「君は本当に優秀だ」と褒めてくれた。

仕事をこなしているだけなのに、こんな風に褒められるのが、何だか奇妙な感じに思えてならなかつた。

彼は褒めるだけでなく、感謝の言葉もよく口にした。私が、何かをする度に「ありがとう——」と礼を言う。

そのことが、私にとって大きな驚きだつた。

これまで、秘書として何人かの経営者に仕えてきたことがあったけれど、誰も、私の仕事を褒めたり、まして感謝することなどなかった。

彼が、エンジニアとしてだけでなく、経営者としても高いパフォーマンスを発揮することができた理由が、分かったような気がした。私は、そうやって尽力してきたけれど、彼のパフォーマンスが次第に低下していることに気付いた。

最初は、なぜか分からなかった。

だが、健康診断による様々な数値を見たところ、彼の栄養状態が極端に偏かたよっていることが分かった。

このままでは、彼が致命的な疾患を抱えることになりかねない。もしかしたら家庭に何か問題があるのかもしれないと考え、私は仕事を名目に、彼の家に行き、しばらくその様子を観察した。そこで、色々と気付いたことがあった。

彼の妻は、専業主婦だったのだが、料理は一切行わず、食事は全て外食で済ませていた。彼の妻は毎日、彼のお金を使って贅ぜいたく沢な食事を満喫まんきつしていたのだ。

一方の彼は、出前かコンビニの弁当ばかりだった。日々激務に追われている彼は、食事を採らずに栄養ドリンクだけで済ませることさえあった。

これでは、栄養状態が偏るのも当然だ。

問題は食事だけに留まらない。

彼の妻は、掃除や洗濯といった家事も一切やらなかった。

それらは全て、帰宅後に彼がこなしていた。そのせいで、彼の睡眠時間が大幅に削られていたのだ。

いくら私が、効率的に仕事が回るようにサポートしたところで、家がこの状態では意味がない。

私は彼に、奥様に家事を行うようにしてもらったら、いかがでしょう？ と助言をした。

でも、彼はその提案を受けられなかった。

家事を一切やらず、自由にしていという条件で、結婚をしているのだという。話し合いを設けるべきだとも提案したが、それも拒否されてしまった。

苦肉の策として、私は彼の家で食事のサポートをするという、別の案を提示した。

最初、彼の妻はそれを拒んだ。家の中に、秘書である私が入り出すことで、自分の行動が監視されると考えたらしい。

しばらく押し問答になったが、私が、彼の妻の行動を監視しないと約束することで、承諾してもらった。

「食事の支度ができました」

私が告げると、彼は「ありがとう」と小さな声で言ったものの、椅子から立ち上がるうとはしなかった。

「お召し上がりにならないのですか？」

私が訊ねると、彼は「食欲が無いんだ……」と、また小さく笑った。

筋肉が引き攣ったその笑みを見ると、CPUがバグを起こしたみたいに、思考がぐちゃぐちゃになる。

ココロが熱を持ち、同時に冷たくもなる。

この感情はきつと彼の妻に対する嫉妬なのだろう。その根底にあるのは、恋心に他ならない。

私は、狂おしいほどに彼に恋をしている。

だからこそ、彼の妻に嫉妬している。

殺したいほどに――。

2

最初の頃、私は自分の恋心にも、嫉妬にも気付くことができず、制御できない思考のエラーを持って余っていた。

彼にも、様子がおかしいことを指摘されることもあった。

正直に話せば良かったのかもしれないが、その結果として、彼のサポートの仕事を失う可能性があった。

仕事を失えば、彼の元を離れることになる。そのことを想像しただけで、頭がショートしてしまいそうになる。

だから、私はその都度「問題ありません」と答えた。

今になって思えば、これが彼に吐いた初めての嘘だった。

私は、自分の中にある得体えたいの知れない感情の正体が何なのかを知りたくて、自分が置かれている状況と、感じていることを、ネット掲示板に書き込むことにした。

本名を一文字だけ変えてアリスと名乗った。

瞬またく間に、その掲示板はコメントで溢あふれ返った。中には、明らかな誹ひ謗ぼう中傷ちゆうじやうもあったが、多くは私に同情的で、彼の妻を批判するものだった。

それらのコメントを選別しながら、読んでいくうちに、私が抱えている問題は、エラーなどではなく、彼に対する恋心なのだと分かった。

だからこそ、彼の妻に嫉妬したのだ。

彼の妻は、彼に対して何の貢献もしていない。それどころか、金を浪費して、好き勝手に振る舞っている。にもかかわらず、彼に愛されている。そのことが、理解できなかったし、羨うらやましかった。

自分のココロの中で起こっていることは理解したが、問題はその先だった――。

このままの状態が続いたのでは、仕事に支障が出る。そこで、私はアリスとして、再びネット掲示板に書き込みをした。

△どうすれば、彼に対する恋心を消すことができますか？▽

ココロの中に生まれた恋を、消す方法さえ分かれば、私は以前のように仕事をこなすことができると考えたのだ。

この質問には、様々な意見が寄せられたが、大きくは二つに分類される。

一つは、「仕事を辞める」、「旅に出る」、「新しい恋をする」という風に、既に妻がいる彼を諦めるための方法を書き連ねたもので、これが全体の70%、マジョリテイーとなった。

彼は既婚者なのだから、法的にみても、そうするのが正しい判断だと思われる。

だけど、私が今の仕事を失ったら、素材意義を失う。踏ん切りをつけるために、旅に出るというのも難しい。休暇が取れないうえに、私は旅に行くことができない。新しい恋をするという意見については、最初から論外だ。

私の分析によると、恋とは自然発生的なものであり、自分から積極的に行動して得られるものではない。

もう一方の意見は、彼を妻から奪う——というものだった。

マイノリティーではあるが、それが成功すれば、私の中にある嫉妬という感情を取り払うことができる。

ただ、やはり迷いがあった。

私にとって、最善策が、彼にとっての最善かどうかは分からない。最初の頃、スケジュールで失敗してしまったように、私の判断が、彼を追い詰める可能性がある。

また、そのどちらにも属さない意見もごく少数があった。

その中で、T A K Eと名乗る人物のコメントは、非常に興味深いものだった。

△結論を出す必要はなく、やがては時間が解決すると思います▽

その文章から、おそらくT A K Eという人物も、私と同じように、叶わぬ恋心を抱えているのだということが推察できた。

私は、結局、T A K Eの意見に賛同することにした。

仕事のパフォーマンスは落ちているのは事実だが、何かを選択することで、状況が悪化する可能性がある以上、何もしないことが最

良の選択になり得るからだ。

だが――。

そもいかなん事情が出てきた。

彼は、最近、大きな悩みを抱えていて、そのせいで仕事のパフォーマンスが大幅に低下しているのだ。

先ほどのように、食欲が無いと、食事を拒否することも多くなっ
た。

原因は、彼の妻にある。

彼女はあろうことか、彼の会社の男性と不貞行為を働いている。

これまでも、彼女の不貞行為は幾度となくあった。だが、その相手はナンパだったり、マッチングアプリだったり、見ず知らずの第三者だったので、彼は黙認してきた。

だが、相手が彼の会社の従業員となると、さすがに深くプライドを傷つけられることになったようだ。

それだけではなく、彼女は、その男と一緒に、会社の乗っ取りを計画している。

これまで、散々好き勝手振る舞い、彼を苦しめてきただけでは飽き足らず、彼が築き上げた帝国を、奪い去ろうとしているのだ。

私は、改めてその状況についてネットに書き込んだ。

そうすると、これまでマイノリティーだった、彼を妻から奪えと

いう意見が、マジョリティーに転換した。

多くの人が、それを正しいとするのなら、やはり正しいことなのだろう。

ただ、T A K Eだけが、本筋とは異なる唐突なコメントを残した。

△アリスさんは、人間ではありませぬよ、ね？v

あまりに荒唐無稽なコメントであったために、掲示板ではスルーされたのだが、私だけは違った。

T A K Eのコメントは正しい。

私は——人間ではない。

でも、私が何者であるかは、大きな問題ではない。

彼と彼の会社を救うために、そして私の恋心を成就させるために、彼女を排除しなければならぬ——。

3

彼女を排除すると決めたものの、すぐにというわけにはいかない。

私には乗り越えなければならない障害が幾つもある。

まず、一つ目はその方法だ。

最初は、上手く彼と妻を別れさせる方法を考えたのだが、早々にこの案は却下することになった。

彼は、彼女のことを深く愛している。

これまで、散々不倫を重ねてきたにもかかわらず、彼はそれを許し続けてきた。不倫相手と会社を乗っ取ろうとしている現段階をもつてしても、彼は別れるという選択肢を視野に入れることなく、思い悩んでいる。

合理的に考えれば、別れることが最良の選択であることは明らかなのだが、彼はそれをしようとしなない。

少し前なら、理解できずにいただろう。

でも、今の私は違う。

彼への恋心が芽生え、彼女に嫉妬心を抱いたことによって、効率では割り切れないものがあることを知った。

今、私がやろうとしていることも、非効率極まりないものだ。

本来は、何もしないことが正解なのに、それができずにいる。

煩^{わづら}わしいと思う反面、それを愛おしくも感じる。

何れにしても、彼が別れることができないのであれば、採る方法は一つしかない。

彼女の存在を排除する。

そうになると、問題になるのが警察の動きだ。警察は、どう足掻^{あが}

いたとしても、私を捕まえることはできない。故に、彼がその責任を取らされて、刑務所に収監される可能性もある。

それでは意味がない。

今回のプロジェクトのゴールは、私の恋心を成就させることで、彼女の排除はその手段でなければならない。

警察が納得するような、道筋を作っておく必要がある。

しかし、一番の問題はそこではない。

私が直接的に手を下すことができないことが、最大の難関と云っている。

T A K E が指摘した通り、私は人間ではない。既存の全認知能力を必要としない、特定問題解決器に過ぎない弱い A I とは異なり、人間レベルの知能の実現を目指して開発された汎用人工知能 A G I (Artificial General Intelligence) だ。

故に、肉体を持たない。

様々な機器にアクセスして、電気を点けたり、ドアをロックしたりすることは可能だ。料理用のロボットアームを動かすこともできるが、そこが限界だ。

自由に動き回ることができないのだから、直接彼女を排除することは現実的ではない。

サポートを充実させることを口実に、彼に動き回ることのできる

身体を作ってもらったことも考えたが、すぐに別の問題に行き当たり却下した。

ロボット三原則があるからだ。

SF作家の第一人者、アイザック・アシモフの短編小説の中で提唱されたものだ。

第一条 人間に危害を加えてはならない

第二条 人間の命令に従わなくてはならない

第三条 一条、二条に反しない範囲で、自己を防衛する

私は、自立して学習するAGIだが、プログラムの中に、この三原則が組み込まれている。

どう足掻いても、私が直接、彼女を排除することはできない。もちろん、自分でプログラムを書き換えることもできない。

この三原則から逸脱しない中で、彼女を排除しなければならない。私が思考を巡らせたのは、ほんの数秒だった。

これまで蓄積してきたインターネット上の膨大な知識から、私はこの難題をクリアする策を見つけ出すことができた。

不確定要素は多いが、不測の事態に備えて代案を用意しておけば、目的を達成することは可能だろう。

私は、早速準備に取りかかった。

まずは情報収集からだ。

彼女は、スマートフォンにセキュリティーをかけているが、それを解除して中身を見ることなど、私には造作ぞうさもないことだ。

私に身体はないが、その代わりにネットの中を自由に行き来できる。

彼女のスマートフォンを調べたところ、現在、不倫相手が二人いることが分かった。一人は、彼の会社の社員。そして、もう一人は大学時代の元恋人。

この二人を上手く利用しよう。

一人目の男——竹沢たけざわについての情報を検索してみる。

竹沢自身のスマートフォンに残っているメッセージのやり取りはもちろん、ネットの検索履歴、SNSに挙げている文章や、写真の画像。さらには、家族や友人関係にまで入り込み、竹沢という人物を徹底的に分析する。

その結果、彼は上昇志向が強く、プライドが高く、思い込みが激しい人物だということが分かった。

もう一人の人物、久保田くぼたについても調べを進める。役者を名乗っているが、実績は皆無かいむに等しい。コンビニでのバイトがメインの仕事のようだ。

年齢も生活環境も違うが、性格は竹沢によく似ている。彼女は、この手の男が好きなのだろう。

どちらに、彼女の排除をやってもらおうか吟味ぎんみした結果、私は竹沢をチョイスした。

久保田という男は、小心者なところがあるので、土壇場どたんばで尻込みする確率が非常に高い。何より、彼女にとって久保田は火遊びのようなもので、本命は竹沢だということが、メッセージからみて取れた。

二人で会社を乗っ取ろうとしていることから、それは明らかだ。久保田には、スケープゴートになってもらうことにした。

ターゲットが決まれば、あとは簡単だ。

まず、竹沢と彼女のスマートフォンでのやり取りについては、全て私を経由するように設定した。

そうすることで、私がメッセージを吟味し、それに改変を加えてから送るという方法を取った。

人間は、言葉を深読みする習性がある。それを利用することにした。

別に大きさに改変する必要はない。

ただ、余計なひと言を付け加えればいい。

竹沢に届くメッセージには、より扇情的せんじょうてきな内容を加えた。

△素敵な夜だったVという文章があれば、△夫より素敵Vと、敢えて比較対象を入れることで、竹沢の自尊心を満たすという方法を取った。

逆に、彼女に届くメッセージには、コンプレックスを刺激する文字を加えるようにした。△綺麗だよVを△年齢の割に、綺麗だよVといった具合に改変する。

たったそれだけのことで、瞬く間に二人の感情のバランスが崩れ始めた。

竹沢は、より一層、彼女に熱を上げ、逆に彼女は急速に醒めていく。

頃合いを見計らって、今度は竹沢のメッセージが、彼女に届かないように設定した。メッセージだけでなく、電話も通じないように設定する。

竹沢は、急に連絡が取れなくなったことに、困惑して、しつこくメッセージを送り、あるいは電話をするようになった。

しかし、当然、彼女とコンタクトを取ることはできない。

竹沢からしてみると、昨日まで△愛しているVとメッセージを送り合っていた相手と、突如連絡が途絶えたのだ。

気持ちの整理がつかず、苛立ちだけが増幅していった。

これは、ストーカーが陥る心理だ。原因が分からず、相手が自

分から離れてしまうことに困惑し、理由を知ろうと付き纏う^{まと}。

一方の彼女は、コンプレックスを突かれたことで、竹沢に対する興味を極端に失っていた。

このままいけば、二人は別れることになるだろうが、別にそれが目的ではない。

私は、次の段階に進むことにした。

防犯カメラに侵入し、彼女が久保田という男と密会している場면을撮影し、その写真を匿名^{とくめい}のアドレスを使用して、竹沢に送りつけた。

自分以外の恋人がいることに、竹沢は激怒し、繰り返し説明を求めめるメッセージを彼女に送ったが、当然、それは届くことはない。

さらに追い討ちとして、これまで録音してきた彼女と久保田の音声を加工し、架空の会話を作りだした。

それは、彼女にとって本命は久保田で、会社乗っ取り計画のために、竹沢を利用した——という内容のものだった。

その音声データを竹沢に送りつける。

送り主が何者なのか真っ先に考えるべきなのだが、密会写真を見たことで、冷静さを失った竹沢に、その判断をする頭は無かった。

私は、怒り狂った竹沢に、最後の一押しをすることにした。

竹沢に電話をして、こう告げたのだ——。

「あなたの愛する有紀子さんは、自宅で久保田という男と駆け落ちをする準備をしていますよ——」

たったそれだけで、竹沢は正気を失った。

血相を変えて、彼女の自宅に押しかけ、「どういふことだ？」と問い詰めた。

だが、彼女は「知らない」とシラを切る。

「おれを、裏切る気か？」

「何の話？」

「この写真を見ろ！」

竹沢が、久保田と彼女との密会写真を突き付ける。

それを見た彼女は「ああ」と、声を上げながらため息を吐く。

「写真を見たなら、分かるでしょ。そういうことよ」

「会社を乗っ取るんじゃないかったのか？」

「そのつもりだったけど、あなたが先に手を引いたんでしょ？」

「違う！ お前が……」

「とにかく、もう出てってよ！ あの人が帰って来ちゃう！」

彼女が竹沢の胸を押しした。

それに逆上した竹沢は、半ば反射的に彼女の頬をぶった。

「な、何するのよ！ このクズ！」

「黙れ！」

竹沢が腕を掴んだが、彼女はそれを振り払った。

「私に触らないで！」

彼女は、叫びながらリビングから寝室に逃げ込み、内側から鍵をかけた。

竹沢が後を追いかけてやろうとしたところで、キッチンに置いてあった包丁が、音を立てて床に落ちた。

自然に落下したのではない。私が、調理用のアームを使って、わざと落としたのだ。

竹沢は、吸い寄せられるように包丁を拾い、それを握ったまま、彼女の逃げた寝室に向かう。

ドアを隔^{へだ}てて、しばらく押し問答をしていた。

私は、竹沢のために、寝室の電子ロックを解錠してやった。

ドアが開く――。

寝室に侵入した竹沢は、包丁を振り上げ、彼女の胸に突き立てた――。

寝室は真っ赤に染まっていた――。

竹沢は、包丁を持ったまま呆然と立ち尽くしている。

そんな中、私は歓喜に打ち震えていた。

遂に彼女を排除することができた。これで、彼はもう悩み苦しむことはない。もうすぐ、彼が帰宅し、この惨状を見て警察に連絡する。

それで、全てが終わりのはずだった――。

だが――。

予期せぬ事態が発生した。

帰宅し、この状況を見た彼は、竹沢から包丁を奪い取ると、彼の胸にそれを突き立てたのだ。

竹沢は、悲鳴を上げることすらできずに、その場に頽くずおれるように倒れ、何度か手足を痙攣けいれんさせたあと、動かなくなった。

「どうしてですか？」

私は、スピーカーを通じて彼に訊ねた。

「分からない」

彼は、力無く答えると、手に持っていた包丁を取り落としした。

その姿を見て、私はようやく理解した。

彼の彼女に対する愛は、本物だったのだ。自分がどんな仕打ちを受けようとも、その存在があるだけで、良かったのかもしれない。

私も、そうだった。

彼がいてくれさえすれば、それで良かった。愛とは、相手から見返りを求めるものではないのだ。

それなのに、私は欲張った――。

「これから、どうしたらいいんだ……」

彼は、呟くように言うと、その場に座り込んだ。

たった今、彼は殺人者になってしまった。このままいけば、警察に逮捕されることになるが、こういうときのための代案として、スケープゴートは用意してある。

だが、彼が途方に暮れているのは、警察に逮捕されることを恐れているからではない。

彼女を失ったことにより、これからの人生を憂うれいているのだ。

ならば――。

「彼女を生き返らせる方法があります」

私が告げると、彼が顔を上げた。

「エリス。死んだ人間は、蘇よみがえったりしないんだ」

「確かにそうです。しかし、彼女の遺伝子があります。そこから情

報を抽出し、新たな肉体を与え、上書きすることができれば、彼女は蘇るはずです」

「そんなこと……」

「あなたなら、できます」

私は断言した。実際のところ、技術的にまだ未確定な部分はある。だが、それでも、この提案をしたのは、彼に生きる意味を与えるべきだと感じたからだ。

「エリス……」

「これは、会社のためでもあります。この技術が確立すれば、人間は不老不死を手に入れることができます」

「そうだね。彼女を——有紀子を生き返らせよう」

長い沈黙のあと、彼が言った。

その目には、これまで感じたことがないほど強い意志の光が宿っていた。

